

序論)

みなさんは、自分の今の立場や容姿、置かれている状況に満足しておられるでしょうか。私は昔から男性の中では背の小さい方ですから、宇津木さんや創さんのように背の大きい人に対するコンプレックスを持っていました。また、経済的にもそれほど裕福な環境にいませんでしたから、お金をもっている人に対する憧れがありました。だから、一等 5 億円とか、10 億円の宝くじが当たったらあんな車も買える、こんなパソコンも買えると、色々な高級品を買う妄想を昔はよくしていました。

私のようなコンプレックスを持っていなかったとしても、多かれ少なかれ自分の置かれている状況に満足がいくことができず、不満を持ってしまうということは、皆さんも経験したことがあるのではないのでしょうか。

現代社会は、私達が何を持っているか、どんな立場にたっているか、といった目に見える基準によって私達を判断しようとしします。だから、世の中の人はお酒を飲んでは、自分たちの置かれている状況に不満をもって、会社が悪いと文句をいったり、政党や政治家が悪いと愚痴をこぼしたりするわけです。

だから、このような状況にいる私達にとって、自分たちが置かれた状況を、ありのまま受け入れるということは難しいものになっています。

今日の聖書は、そんな私達にこの世の中とは別の視点を与えてくださっています。今日は聖書を通して、私達が本当に気にすべきことが何なのかを教えられていきたいと思います。

コリント教会の状況)

コリント教会の舞台であるコリントの街は、様々な商売と文化が集まる街でした。そのため、多くの人が集まる一方、【主】イエスキリストを信じる人達にとっては社会的プレッシャーの強い街でもありました。そのため、コリント教会の人たちは自分たちがどのように振る舞ったら良いか、悩みの中にありました。

特にコリント教会の人たちの頭を悩ませていたのが、割礼の問題と奴隷という立場の問題です。

1) 分に応じて、召されたときのまま歩め

割礼問題、奴隷問題に対しては後ほど詳しく話すとして、そのように自分たちがローマ社会の中でどのように振る舞ったらいいかを悩んでいるコリント教会の人た

ちに対してパウロは 17 節のように述べています。

7:17 ただ、それぞれ主からいただいた分に応じて、また、それぞれ神から召されたときのままの状態です。私はすべての教会に、そのように命じています。

これは簡単に言えば、ユダヤ人として割礼を受けていたのならば、割礼を受けたままで、異邦人として割礼を受けていないなら割礼を受けないままで、奴隷ならば奴隷のままでいて、わざわざ自分の状態を変えようとしなくて、救われた時の状態のままでいなさい。ということです。

割礼を受ける・受けないは、ユダヤ人も異邦人も元々そのままの状態を良しとしていたわけですから納得できますが、奴隷の人に奴隷のままでいなさい。というのは、現代的な価値観でいうと、パウロは酷いことを言っているように思えます。

なぜ、パウロはこのようないったのでしょうか？

それはパウロにとって一人ひとりの置かれた状況というのは、不公平な状況ではなく、神様から与えられた分だったからです。「分」ということばは普段使われないことばですが、別の言い方をすると分け前や取り分となります。パウロにとってそれぞれの人々が置かれていた状況や身分というのは、不平をいうべきものではなく、神様から与えられた分け前だったのです。

みなさん、イエス様が言われたタラントの例え覚えていますか？ 主人がある人には 5 タラント与え、他の人には 2 タラントを与え、そして、もう一人のしもべには 1 タラントを与えた。という例え話です。

そして、5 タラント与えられた人は 5 タラントを儲け、2 タラント与えられた人は 2 タラントを儲けました。また、1 タラント与えられた人はそれを有効に使わず 1 タラントとそのまま主人に返却しただけでした。主人は 1 タラントを返却した人を怠け者と叱りましたが、5 タラントと 2 タラントを儲けた人たちには同じ言葉で「よくやった。良い忠実なしもべだ」といって褒めました。

主人にとっていくら儲けるかは関係なかったのです。多く与えられた人は多く与えられた人なりに、少なく与えられた人は少なく与えられた人なりに、主人の期待に応じて自分に与えられたものを用いたので彼らは褒められました。

私達に与えられた財産や立場も同じなのです。人間的には最も避けたい立場である奴隷さえも神様から与えられた分け前として受け取り、その与えられた立場、状

況を有効に用いて歩んでいく。それがキリストによって救われた私達の歩むべき生き方なのです。

みなさん、みなさんに与えられた分け前はなんでしょうか。豊かな知識や経験を積むことができるという分け前かもしれません。私のように喘息を持ちながら生きるという分け前かもしれません。経済的に貧しい状況の中で生きていくという分け前かもしれません。私達は、知識も経験も、経済力も立場もそれぞれ違います。でも、【主】がみなさん、お一人お一人に与えられた状況を、【主】からの分け前として受け取り、その分け前を有効に用いて【主】の期待に応えていく。それが私達、クリスチャンの生き方なのです。

2) 見た目を気にしてはいけない

次にパウロは 18 節から 20 節で割礼の問題を取り上げています。18 節を読みましょう。

7:18 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくそうとはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。

割礼問題というと聖書をよく知っている人は、一つのことがピンとくるのではないのでしょうか。それは旧約律法を大切にユダヤ人クリスチャンの中には、割礼をすることが救いに通じると考える人たちがいたということです。

実際、使徒の働きをみると、クリスチャンが割礼をするか、しないかということが、大きな問題になって、エルサレムで教会会議が行われて審議されたことが書かれています。そして会議の結論は、イエス様を信じた異邦人クリスチャンは割礼をしなくてもよいという事でした。

だから、異邦人クリスチャンは割礼をしなくてよいのですが、初代教会が直面していた割礼問題は、異邦人クリスチャンが割礼をするべきか、しないべきか、という問題だけに留まらず、既に割礼をしてしまったクリスチャンがその割礼を無くすべきか、無くさないのか。という問題にも繋がっていったのです。

なぜ、そんな問題が出てきたかというと、当時のギリシャ・ローマ社会において割礼は侮蔑の対象だったからです。ローマ人たちは、体に人工的な変化を加えるということは野蛮なことであり、そのように加工を加えた体は醜いものだと考えていました。その結果、当時の街にはギムナジオンという体を鍛える体育館があった

のですが、その体育館は裸で利用することが決められていたため、割礼をしている人はその体育館の利用を禁止されていました。また、当時、多くの人々に愛されていたテルマエという大衆浴場も、割礼をしている人は、人々からの批判をさけるために控えていました。だから、割礼をしていたユダヤ人の中には、その割礼の跡^{あと}を隠すための手術をする人たちがいたようなのです。だから、割礼は宗教的な問題だけでなく、見た目の問題でもあったのです。

日本の文化的に考えると、割礼をしている人というのは、入れ墨をしている人と同じかもしれません。最近では価値観が少し変わってきていますが、日本では入れ墨をしている人は、何か危ないことをしている人、怖い人というイメージがありました。だから、一昔前は、普通の人が入れ墨を入れるのは避けるべきものだという考えがありました。実際、多くの大衆浴場では今も、入れ墨をしている人の利用を禁止しています。

でも、聖書的に考えると、割礼をしているか、していないか、入れ墨をしているか、していないかは大きな問題ではないのです。19 節を読んでみましょう。

7:19 割礼は取るに足りないこと、無割礼も取るに足りないことです。重要なのは神の命令を守ることです。

みなさん、パウロは何が重要だと言っていますか？ そう、重要なのは神の命令を守ること、つまり、神様の御心に従っていきることなのです。だから、大きな入れ墨をしている人が救われた後、その入れ墨を消していなかったとしても問題はないのです。大切なのは、イエス様が言われたように神様を愛して生きているか、隣人を愛して生きているか。【主】の御心に従って生きているかどうかなのです。

みなさん、世の中は人を見た目で判断します。でも、私達が気にすべきなのは見た目ではなく、【主】に従っているかどうかなのです。

みなさんは【主】に従うことを実践できているでしょうか。

3) この世の立場を気にしてはいけない

次にパウロは 21 節、22 節で奴隷の問題を取り扱っています。21 節を読みましょう。

7:21 あなたが奴隷の状態で召されたのなら、そのことを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう。

当時、ローマ社会において奴隷は人口の 3 分の 1 を占めていたと言われていました。3 人に 1 人は奴隷なわけですから、当然、教会の中にも奴隷の立場の人がいました。ただし、奴隷といっても借金奴隷、犯罪奴隷、戦争奴隷、生まれながらの奴隷がいて、任されていた仕事も家の財産すべての管理が委ねられているような奴隷から、人が嫌がるような仕事だけを与えられている奴隷もいました。ですから、一言で奴隷といっても、それぞれが置かれている状況は違っていたのです。共通点は、奴隷であるうちは人権が認められず、主人の所有物、財産として扱われていたということです。

パウロはそれでも、奴隷であることを気にするなといえます。なぜなら、救われた人の本質的な立場は、奴隷も自由人も変わりがないからです。22 節を読みましよう。

7:22 主にあって召された奴隷は、主に属する自由人であり、同じように自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。

「主にあって召された」というのは、救われたということです。救われた人は、奴隷であっても【主】に属する自由人であり、自由人であってもキリストに属する奴隷なのです。大切なのは、救われた人は、【主】に属する人であり、キリストに属する人である。ということです。私達は社会的にどのような立場であったとしても、本質的には【主】に属するものである。ということは変わりがないのです。

だから、【主】から与えられた分け前として、奴隷という立場が与えられていたとしても、気にするな。と聖書はっています。

ただし、21 節に戻りますが、奴隷の立場から自由人になれるチャンスがあったら、そのチャンスを用いたらよいとも勧められています。つまり、これも神様からの恵みとして、今の立場を改善する。そのようなチャンスが与えられたならば、そのチャンスを用いなさい。といことでしょう。

大切なのは、自分の力でなんとかして、この世の立場を変えようと藻掻くよりも、「自分は【主】に属し、キリストに属するものなのだ」という意識や、「自分の本当の主人は、神様であり、キリストなのだ」という自己認識をしっかり持つということです。だから、エペソ 6 章 5-7 節にはこのように書かれています。

エペソ人への手紙

6:5 奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

6:6 ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、

6:7 人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。

だから、私達は自分に与えられている立場、分け前を用いて、【主】に仕えるように、それぞれの仕事をしていくのです。【主】に仕えるように、職場に仕え、【主】に仕えるように家族に仕え、【主】を愛するように、人々を愛していく。それが大切なのです。

だから、今、私達が【主】にどんな分け前を与えられているのか、2タラント与えられているのか、5タラント与えられているのか、奴隷という分け前を与えられているのか、自由人という分け前を与えられているのかは違うけども、それらを気にするなと聖書はいうのです。

みなさん、みなさんは自分に与えられた分に応じて、【主】に仕えるように、それぞれの働きをしておられるでしょうか。

4) キリスト者の立場は、神に買い取られた神のもの

パウロは改めてキリスト者の立場を 23 節のように定義しています。

7:23 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。人間の奴隷となつてはいけません。

「代価を払って買い取られた」というのは、イエス様が私達の罪を贖うために、十字架で身代わりになって死んでくださったことです。「買い取られた」というのは、まさに奴隷市場で奴隷が買われるときに使われる表現です。イエス様は私達を救うために十字架の上でその血を流されたことにより、私たちの所有権を買い取ってくださったのです。だから、私達がこの世で奴隷であったとしても、逆に裕福で多くの人を使う立場にあったとしても、私達は、キリストのしもべとして歩むのです。

大切なのはこの世の人の価値観や思い込みや先入観、暗黙の了解といった人が決めた基準に従うことなく、【主】のみ心に従ってくことなのです。

「人間の奴隷になつてはいけません」というのは、そういうことです。奴隷が主人に反逆するように勧めているわけではありません。

みなさんは人の奴隷になっていないでしょうか。優秀な人のことばを鵜呑みにして【主】のみ心を探ることを後回しにしていないでしょうか。この世の価値観、基準に合わせることに必死になって、聖書を読んで【主】の前に静まることを後回しにしまったり、やめてしまったりしていないでしょうか？

私達の所有者は、キリストであり、【主】なのです。だから、どんな立場にあったとしても、私達の【主】の御心を求めることをやめず、【主】に従うことを最優先にしていきましょう。

結論)

最後に 24 節を読みましょう。

7:24 兄弟たち、それぞれ召されたときのままの状態で、神の御前にいなさい。

大切なのは、どんな見た目、どんな立場にあったとしても、その与えられた状況の中で、神様の御前に居続けることです。私達が意識すべきなのは、人からの見た目でも、自分の置かれている不幸な立場でもありません。大切なのは【主】の前に自分がいるということです。

みなさんは、職場において、家庭において、学校において、【主】のみ前にいることを意識していますか？ 神様が、今のみなさんに何を求めておられるのか、どのように生きることを求めておられるのかを、意識しておられるでしょうか？

そもそも、みなさんの所有者である【主】のみこころを聞くことを日々しておられるでしょうか。

みなさんに与えられている状況や環境は、【主】から与えられた分け前です。その分け前を有効に用いて、【主】のみ心を実現していきましょう。

人の目や、自分の立場を気にする必要はありません。寧ろ、それらは【主】に従うための道具として理解し、そのままの状況で、【主】の命令を実践することに意識を向けていきましょう。

もちろん、神様がみなさんの状況を改善させてくださるのならば、それを拒否する必要もありません。大切なのは、その【主】の導きの中で、どのように【主】に仕えていくか。それだけなのです。